

---

# 東方夜闇伝

龍竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方夜闇伝

### 【Zコード】

Z4910Y

### 【作者名】

龍竜

### 【あらすじ】

神のミスで最悪な人生を歩き続けてそしてとうとう死んでしまった傭兵、しかし本当はもっと幸せに生き、殺し合いとは無関係な人生だつたそして設定したはずの寿命も生きていなかつた、だから転生する話

オリ主、恋愛関係もあるかも

最低でも完結を目指したいと思います

## プロローグ（前書き）

初めまして、龍竜とお詫びします

書くことは、初めてではありませんが他の方々と比べるまでもない

文才ですが

それでも良いこと、書く方は下へどうぞ

## プロローグ

……」「は？」

目の前にはなんか真っ白な世界だつたそして後ろを向くと

「すいませんでしたあああああああ」

となんか白い羽?と真っ白な服装をした女性が土下座してた

正直言おつ自分は死んだのかと思った、いやだつて羽がある人がいる時点でそう思つじやん?

え?冷静すぎ?これでも修羅場を結構潜つてきたんだ、どんな状況でも冷静で…  
使う場所間違えてるな…  
まあいいや

「で、」「は？」だ?俺は死んだのか?」

「はい、死にました」

「そりが、死んだのか…だがなんで土下座してるんだ?、死んだのなら死んだでいいじゃないか」

「実はですね、あなたは本当はもつと幸福で結婚もして本当に普通に幸せに生きる人生でした、でも私のミスであなたは最悪の人生でした、そして神々で話あつてみた結果あなたを転生せることになりました」

「ほう、転生となでも転生でも元の所に戻れるのか？」

「いいえ、それはできません、あなたの魂はすでに道を歩み終えます、ですから戻すと…その場ですぐに死んでしまいます、ですか別の世界に送ります」

「別の世界?どうゆうことだ?」

「簡単に言つとゲームとかアニメの世界です」

「なるほどまるで夢みたいだな、でもどんな世界に転生するんだ?」

「東方つていつ世界です」

「東方?…ああなんか聞いたことあるな、たしか妖怪とかがいる世界だろ?」

「そうです、あなたをその世界に送ります。あ、あと人種も選べますよ、あと要望があれば三回までけます」

「ふむ、人種は…妖怪…かな?要望か、じゃあ俺が使ってた接近系の武器全部とその武器を壊れないようにしてほしい、あとは闇系の能力がほしい」

「他はなんとかできます、なぜ闇なんですか?」

「闇だと色々と楽だろ?それに闇と言つたら強いイメージがあつてなそれに妖怪だろ?、なら闇つていえば恐怖の主張だと思つんだ」

「あなたはなかなか頭が切れるみたいですね、わかりました闇を操る能力にします、これは努力次第ではもっと強くなりまます」

「あつがとつ、では送ってくれ…ああやいえばまた会えるのか?」

「会えますよ、ひつりも問題が起じればわざわざいらしておいででありますから」

「わかった、色々と感謝する ではまた会いつ

「はい」

……で、どうやって送るんだ?

「ではまた会いましょう」

……「ふふ?なんか立ってる感覚が…

「ああああああああああああああああ」

足元に穴が空き俺はそのまま落ちて行った



## プロローグ（後書き）

どうでしたか？

感想や誤字報告があればよろしくお願いします

## 主人公設定（前書き）

主人公の設定です、いつか書くと思って書き溜めしてたりします

## 主人公設定

オリ主

ゼロ・ブラック・レリック

特徴

真っ黒な服装と真っ黒の髪と真っ赤な眼が特徴

容姿

髪の長さは非常に長い腰まである

顔だちはかなりのイケメンでか完ぺきなイケメン十人中九人がイケメンと言つほどである

体系は無駄な筋肉がない痩せマッチョ

性格 冷静

属性 閻

能力

闇を操る能力（程度が無いのはかぶらないため）  
あらゆる武器を扱う能力

主「以上です、武器とかは話の中でお願いします」

「おい、主」

主「ん? どうしたの?」

「転生前のこと書かなくていいいのか?」

主「だつて、過去話としてだす予定だしだいたいの話は脳内でつくつてたし」

「お前つて結構暇人なんだな」

主「うん今は暇人だよでも設定書くのとか楽しいからねゲーム感覚でオリキャラとか考える楽しいし」

「そりゃ、で、なんで俺の所に名前がないんだ?」

主「実はね、あの名前だと色々と問題があるんだよ だからある程度厨一の名前を考えてるんだ」

「それでも俺の名前なんか厨一だぞ」

主「何を言つてるんだ厨一って言つのは物語とかには絶対必要だから結構必須だぞ、その前に厨一って人の認識がおかしいと思うんだ、リアルとか抜きにして」

「それも… そりゃ…?」

主「そうだよ、あ、」のまんな行くと終つやつに無こかうじりまで  
にするね、次回また会いましょう」

一話 眼が覚めたらなんか恐ろしい時代にいた（前書き）

では、一話田でありますへお願いします

## 一話 眼が覚めたらなんか恐ろしい時代にいた

「う…………ううはっ、どこだ」

周りを見渡すと木、木、木、木、木、木、足、木…足?

「GYAAAAAAA」

…まで今俺は目の前の物に眼を疑うけど相手はまつてくれない

「があああああ」

「うおーっと、なんでトレックスがいるんだよ… ……」

俺は即座に腰に在る武器を確認する

「剣が4本と大剣が1本…十分だ… ……」

確認を終えた俺は相手の動きをけん制しながら剣を抜く

今持つてゐる剣の名前はオメガブレード、俺の武器を作つてた人があるゲームから付けた名前だ色は紫の刃が特徴である

相手のトレックスは前に態勢を傾け初進をつけて突っ込んできた

おそれく俺を弱らせてからゆっくりと食いつもりだろう

だが残念ながらその程度だ

「まあまあ！－！－！」

「アカウントアカウント」

俺はサイドステップで突進を避けてすれ違いざまに足の付け根を斬る

スピードを殺しきれなかつたアレッケスせわのまんま転んだ

おそれりくじじつはもう駄目だTレックステの微妙なバランスで立つてるため筋力とか半端じゃない  
が片足でもダメージを受けると立つじとすらできなくなる

俺はそのまま大剣を首に振り下ろす

「しかし面倒くさい時代に送られたもんだ、おつと神様聞こえるか

い  
?

(はい、聞いてますどうしましたか？)

「能力つてどうやって使うんだ?」

( 間ですか、まあイメージです )

「イメージか…わかつたありがとう」

(いえいえでは)

「イメージねえ、そーやー！」

俺は右手に少しだけ何かを出すよつてイメージした  
そしたらなんか真っ黒な何かがあった、テニスボールくらいの大き  
さだ

「これが闇…か」

投げてみたらどうだろ？と思ひ、振りかぶつて思ひつめつ近くの岩  
に投げた

そしたらどうでしょ？、ただけじゃなく岩場がけしとんだよ

「…なん…だと、すゞい威力だこれほんちやんと調整できるよつて  
練しないとな」

俺はそう思ひながら寝ることこした場所は木の上だ、なぜかつて？  
寝る場所ってあんまりこの時代だと安心できる場所がないんだよ

次の日

俺は闇を武器の形とかにできなかと思ひてやってみる

そしたら色々と大変だった　なんとか武器の形にはできたけどその  
武器からなんか闇の力っぽいのが溢れてて地面に当たるとなぜか地

面の草が焼けたよつになるからだ

すぐに消したけど自分の周りは焼け野原みたいになってしまった  
やれやれと思いながら獲物を探す、今日はトリケラトプスかな　目の前に群れがいる

俺は夜を狙つて子供を斬り殺し引きずつては剥いで食べる所を全てとり、残った部分は埋めた

とかまあこんな感じに何年も過ごした

100年以上はたつたと思う　え？飛ばしそう？だって毎日練習と訓練と狩りの毎日だぜ

そんなのみでどう思うよそれと隕石が落ちてきた超巨大だったよ

それと今は氷河期だ

なんか恐竜の時代でもかなり後期だつたらしい、俺は今日の前にいる超でけトラとやり合つてる

正直でかすぎだろ、たしかサーべルタイガーだつたか 現在の生き物の中で最強だと思うその巨体

こんなのに乗つかられたら食われるだけ、俺じゃなければ

俺はこれよりでかい奴を嫌というほど相手にしてきたんだこの程度どうにでもなる

少し隙をだすとそこを突こうとする、俺は的確に頭を切り落とした  
「これで、また食料ゲットっとそれにしても何年たつたかなーおつ  
と肉が凍るー！」

実は闇つてのは便利だ、50年以上前にきずいたけどこれ物を焼く  
ことできるし、翼にすれば飛ぶこともできる、あと最近できるよ  
うになつたけど闇を形にできるようになつた、剣にすれば普通に剣  
にもできる切れ味は自分で決めることができる、本当に闇は便利だ

氷河期がやつと終わった

万年くらいの年だと思つ

自然も戻ってきたし、人間いつかなー

と思って、久しぶりに空を飛ぶと北京原人がいた…ここつて北京な  
んだ…

人間となるまで俺は狩りと練習と訓練を毎日のようにやつた

何百年かたつたきがする、適當?何を言つてるんだ自分の位置がは  
つきりしないし、カレンダーもないよつた時代でどうしろと

まあそれは置いといて、なんか未来都市っぽいのがある

俺は自分の妖力を抑えて町に入つてみる

門があり、そして2011年には無いような物まである俺はキョロキョロしてると田の前になんか可愛い子が俺を見上げてた。

「ん? どうしたんだい?」

「どうしたのはこいつの台詞よ、キョロキョロして」

それもそつか

「それはすまないな、初めて来たもんで 俺は…ブラックだ、きみの名前は?」

俺は名前を簡潔に言ひ

「あら、『十一寧』にどうも私はハ意 永琳医者の見習いよ

医者か… 小さいのにすごいな

「俺は旅人かな?、まあ眼についたから来ただけだね」

「じゃあ家に来て!、旅人なら色々なことじつてるでしょ?」

「…………わかつた行こう」

俺はひとまずつっこめてく」とこした

そして向かつて行くとなんかすゞい大きい家がある、見方によつては城にも見える

俺が門の前までいくと

「止まれ！何者だ！お嬢様をどつする気だ！」

「まつて私の客人よ」

「…………わかりました」

お嬢様？なんかすごい人に眼を付けられたもんだ

そして俺はそのまんま永琳の部屋と思われる所にきた

「座つて、今お茶をだすから」

この年でお茶か… 随分と礼儀正しい子だ

「ありがとう」

「ずずつお、かなりうまいな

「随分とおいしいお茶だな、誰に教えてもらつた？」

「あらあらありがとう、これは自分で調べたのよ

なんと自分で調べるしてだと、この時代ではおお茶つていつのはあんまりと思ってたんだが今日は何度も驚かせられるな

「それより、旅の話聞かせてよ」

「ん、良いぞ どんな話が良い?」

「じゃあ外はどんな動物がいるの?」

動物か… 最近妖怪と思われる生き物が出てきているからビックリだか

「ふむ、色々いるが でもあんまりいいのはいないな、あつでも…

……」

と色々な生き物の話をした、それと自分の名前を変えたいことも

「なんで名前変えたいの? 親からもひりつたんじゃないの?」

そもそもしが俺が転生してきたなんて言えないわけだ

「実を語つと俺のいた所ではある程度歳をとると名前を変えるんだ  
でも俺は異端者でな、追放されたからな」

つて語つてしまつた正直これが失敗だった

「やうなの………… じゃあしばらく行くあてがなにならいいに泊まつ  
たら?」

「いいのか?」

「いいのよ、ついでに名前も考えましょ

「本当に向からり向まであつがとう

「では名前を考えましょ~、ん~」

俺も考えるがあんまり良い名前が思いつかない

「じゃあ、闇夜は?」

「闇夜?、なんか良~い名前だなうんそれにしてしそう、ありがとうございます!」

「ありそれでよかつたの?..」

「ああ俺には十分な名前だ」

「じゃあ闇夜、これからよろしくね」

「よろしくするのは俺の方だがな、では改めてよろしくへへじ~」

「ええよろしくへへ

「うして俺の名前が決まった

闇夜  
やみよ

この俺には十分名前だ



## 一話 眼が覚めたらなんか恐ろしい時代だった（後書き）

主「よしやめたー闇夜つて如何いつかな？」

闇「ああ、ひとつも良こと思ひにせざれでいいのか？」

主「俺とこにはあんまり良こ名前が浮かばなくて闇 読み方 って調べたら即効で出てきたからこれにした」

闇「適当な翻には良こと思ひつな」

主「俺もやつ思ひ、おひといのまんまだと終わりがなせやつだからじいに終わるよ、感想とか誤字とかこじがおかしいとかお願いしますでせまた」

## 1話（前書き）

あとやつてみたい書き方を主にやりました  
読みにくいくらいお願いします  
1話です、修正したら遅れました

俺は眼を覚ました

軽く周りを見る、質素な部屋だが野宿よりマシだ

ひとまず俺は着替えることにした、上着を脱いだところドアからノックが聞こえた

なぜドアと思ひナビ外が和風に見える割には中が洋風だったんだよ  
すごいよな

それはそつと返事しなければ

「はー」

「闇夜様、朝ご飯ができるので食堂の方へお願いします」

「わかりました」

そして着替え終えた俺は食堂へ向かう、しかし寝ておいた

「おはよう

と永琳

「おはよう

と永琳の親父さん

「おまよハリヤリコモト」

と俺も返して席に着く、そしていただきますと言つて食べ始めた時  
親父さんが

「闇夜さんだつたな、ビニの生まれかな?」

「かなり遠くの山奥です」

正直良心が痛むが、しかたないかな

「ほお、じゃあかなり遠くからきたんじやな理由は聞いてあるよ何  
が原因かな?」

俺は永琳をチラと見た、小切れハーフめんと返され俺はしかたなく

「まあ俺は妖怪と人間のハーフなんで」

と出まかせを言つてしまつた、親父さんは眼を大きく見開き 永琳  
もおなじなようだ

「ほつ、妖怪とか人間か…すじこのうわんなることがあるのか」

なんか関心された、そのあとは他愛もない話で盛り上がつた

朝食を食べ終わり俺はこの家の書物を読んでみることにした、すじ  
い量だ

ひとまず妖怪についての資料を読んでみようと思つ、しかしにっぽ

いあるな…ん? 201~2098月になおい  
まあいいや、片づけしから読んだやうつ

ひとまず今日は時間をフルに使って、209まで読んだ

「ここまで、わかつたことは妖怪は普通に何千年も生きるらしい、  
俺何万年か生きてるんだけど

今日も平和だと思って寝ることとした

次の日も同じように書物を読みふけるが、たまに永琳から血をとり  
れる

そして書物に戻ろうとしたら親父さんに声かけられた

「妖怪退治?」

「妖怪かーどんな奴ですか?」

「セイウくんにいる奴じゃ、数が多く手の上の町を開けるわけにも  
行かないし困つてたんじや」

「まあ住まわせてもらひてゐるこいですよ」

「セイウか、わかつた明日からお願ひするよ場所は明日地図を渡すか  
うちゃんと準備するんじやよ」

俺はいつも通りに準備をする、武器の確認と非常食の確認をした水も確認して、服装をどうするか迷つてる

実は闇つてのは服にもなる、原理は不明だが剣と翼を作れる時点で予測できる

本当に闇つてのは便利だ

次の日俺は永琳に見送られながら討伐に出かけた

言われた場所は山の奥深くで谷があつた滝が枯れたのか知らんがすごいでかい、奥は真っ暗で本来は見えないが俺の眼は非常に暗いのに強いこれも闇の妖怪のおかげだけね

谷の真つ暗なところを見てみるとすこし数の妖怪一匹の妖怪の周りにいる、すこし力がある妖怪だろう言葉をしゃべってる

聞く限り町を襲撃する準備をしてるようだ、それにしても数だけはすごい万いるかな？それはないか

こいつらを蹴散らすのは簡単だ、でも数的に皆殺しは無理だ 絶対に何匹かには逃げられる

こうなつたら俺に集中的に狙わせて町から遠ざけるつてのがある

失敗すれば俺に依頼したのが妖怪にばれて町に向かわれるがうまく行けば俺の修行にもなるし、町も守られる我ながら良い案だと思つ

思えば鳥合の衆だ、大将を兆発しておけばいいんじゃないかの大將は馬鹿そうだしやつてみる価値があるな

「おい」

「ん? 何だ貴様は! ! !」

「お前が大将だよな?」

「そうだ人間よ、どうした?俺らの食糧になりに来てくれたのか?」

「嫌?違うが

「じゃあ何しに来たのだ、まあどっちみち食つてやるけどな

「じゃあ食つてみろよ、まつ無理だろうけどな

「なんだと!お前らやつちまえ

「どうした? 来ないのか? 捕まえて見せりよ

「うがああああ、ゆるさんぞ人間捕まえてハつ裂きにしろ、町は後  
だああああ」

作戦成功、結構バカだなほんと でも兆発が苦手だったからどうし  
ようと思つたんだけどうまく行くもんだな

それより沸点低くね? まあ成功したんだしいいか

さて永琳に連絡しどとか、闇をうまく使つと薙葉も載せれる、本当に闇便利

(妖怪を連れて遠くに行くよ元氣で)

怒りが冷めるだらう時に命わせて兆発を繰り返し、どんどん離れていく一日以上走り続けたけど妖怪の群れはかなり増えてきた……増えてきた?どうゆうことなの、そこで俺は後ろをチラつと見てみたそしたら

「よう、一緒に人食わないか」的なこといつて呼び出してた。正直数が半端じゃないこの数だとあのあたりの妖怪ほぼ連れてきたみたいだ

さらに三日走り続けた妖怪達にも疲れが見え始めた、しかしながら餓えの方が上まわったのかガンガンとスピード上げてくる

しかもよだれ垂らしながらだ、正直そろそろ飽きた そう思つたら開けた場所に出た

俺はある程度平らな所で向かつてくる妖怪の方に闇で作った壁をつくり先頭にいた妖怪の突進を止める

そのあと俺は立ち止まつてゐるため妖怪達は俺を囲み始めた、俺は周りに壁を作り抜け駆けしようとする妖怪を止め

完全に俺を囲み終えた所にあの馬鹿面妖怪がでてきた

「やつと…やえぜえ追い詰め…ぜえぜえ追い詰めたやお、おとなしく俺に食われる」

なんつうか、すんげえ迫力もなんもない威儀もないなと思ったが俺は気づいた

ここに元々威儀もなかつたな

「なんだとこの野郎…」

「うん~どうして分かつた?」

「声にだしてたんだわ!が!…!…」

声に出てたか、さて足音も聞こえなくなつたしだらりまじめにやるかな

俺は開幕に手から妖力を込めたレーザーを撃つ、大きさは…かなりの大きさだ多分全高5mぐらいだ

「ギギッ ロシチマヒヒヒ」

とつとう餓えで我を失いかけてきたか、わつわまでまともにしゃべつてたがどうやら絶好の餌を田の前にしてとつとう理性の方が崩壊したようだ

俺はひとまず全力で消し飛ばすことだけを考えて砲撃をする、あの

馬鹿大将を先に倒すと指揮が崩れて逃亡するのが出るからだ。全てを殺しとかないと妖怪共はやけを起こす可能性がある。だから全力で一匹残らず消し飛ばす

「ギギツオマエドウゾクダツタノカ」

聞き取りにくい声だ、それにしてもいまさら氣づいたのか？やつぱ馬鹿だな

実は俺は走りながら妖力を使いながら走つてたから体力はあんまり減つてない

「　「　「　ギヤアアアアアアアアアアアアアア」　「　「

妖怪達は叫びながら素早く飛び込んでくる、しかも直進力しかないような動きだ　俺は横にギリギリで避けて背中に回し蹴りをするこのままだと押し切られるかもしね、そう思つた俺は妖力を全て使いきるように闇をかき集める

勿論ある程度動き回る、少し暗くなつてきたおかげか闇を集めやすいかなり闇を集めた、おそらく人間から見たら真つ暗だらう

闇の影響で瘴気が出てきた、妖怪達がすこし苦しそうだ　俺はその闇を全方向にぶちました

「　「　「　「　ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア」　「　「

「　」

さっきまでの平らな野原は真っ赤だったが今は焼け野原より酷く、草一つも木が一本もない

在るのは俺だけ、俺は永琳の所に向かおうとした

その直後地響きが聞こえてきた

スペースシャトルみたいな物が空高く飛び始めた、俺はまさかと思ひ急いで町にもどった

町はあつたけど、門も壁も跡はあつた 家は全て焼けた跡があつた  
が家には見えない これは町と言えるのか 否 町だつた物がそこ  
にあつた

周りの木は枯れ、水は汚れてる 俺はこれを見て思つた、核汚染つ  
て奴だ

妖怪に恐れてたから門を作り、壁を作つたはずだ まあ光線銃は抜  
きにしてだ

核?なぜ…俺は闇を纏いながら永琳の家だつた所に戻る、家はほと  
んど残つて無かつた

何か残つてないかと思つたけど何もなかつた

何かあつたのか？その疑問に答える人はいない

俺はまた独りになつた

独りはもう慣れた、だけど久しぶりにあつた人間だった 悲しいとは思わない 寂しいとは思わない

いつか会えるだろ？と思つた、だからそれまで生きておこうと思つ

このあたりにいた人間はいなかつた、俺は日本になる予定の島へ向かうこととした

でも妖力を使いすぎたらしい、眠い 僕は何とか日本に来れた、けどもう限界だ

俺は闇の妖怪だから洞窟はすごい住みやすい、妖力を吸収する速さもかなり早い

でも年百年近くの妖力を一気に放出したのはまずかった、力が入ら

ない

俺は最後の力で結界を張り、闇で作った毛布もじきを纏つた

次はいつ眼を覚ますか、人間はいるのか次はだれと出会えるのか  
楽しみでしかたない

そう思い俺は眼を閉じた

## 一話（後書き）

主「やつとでもおもった、一話……、荒井スミスさん感想をありがと  
いへりやござました！」

闇「おー、色々と中途半端と言われたぞ」れからいづりある

主「厳しいです、書いた奴を今から修正しても良いんですが、俺の  
ことですから絶対ミスります」

闇「それより今回色々と無理やりだな」

主「だつて永琳の所がなり難しいんだもん、三つほどルートを考えた  
けどそれ以前にどうやって月に送るかだつたし」

闇「まあ、お前の力量なんぞわかつては仕方ないとはいわんぞ」

主「仕方ないで終れたらどれだけ楽か、でも自分の力量はわかつて  
るつもりだから自分のできる限りのことをするよ」

闇「それと俺あんまり喋つてないな、面倒くさいのか？」

主「いや？面倒くさいだつたらうんて恐れ多くて書けないよ、  
実は自分の力不足でキャラを表現しきれないのが一番こわいからね、  
でもいつまでも力不足とか言つてられないから俺は他の方々のうん  
を参考にして行きます、できればレベルアップして行きたいです。  
ですから感想をください、要望があれば聞きますので ではでは次  
回で会いましょう！」

現在の幻想郷での妖力関係で強い順、 妖夢 > 咲夜 魔理沙 >  
レミコア ゆゆ様 > フラン 紫 靈夢 <<< 閻夜（現在）  
(主の中では)

あと今回は闇夜視点を集中的に書きました、明日には永琳編も送ります

## 一話 永琳視点（前書き）

遅くなりました、良いわけはしません本当にすこませんでした

まあ理由が部活が厳しくなったのが原因ですけどね

あと今回は永琳視点です、時系列は永琳が夜闇に出会いつゝ前からです  
あと短いです

## 一話 永琳視点

今日もいつも通りの少しつまらない日だと思ってた、いつも通り新しい薬を考え実験しようと思つてた。でも素材が切れてたから外に出てきたけど切れてた物が妖怪血だつた、私は考えた妖怪は人間と違あらゆる能力が高いその中に勿論治癒力と寿命がズバ抜けてた私はどうやつて妖怪の血を得るか考えてた、その時少し変わった人：もとい妖怪が歩いてきた

変わつたというよりかなり浮いてた、なぜかそれは真つ黒な服装、真つ黒な髪しかもかなり長い、違うと言えば赤い眼だ  
どうから見ても妖怪にしか見えないが他から見ては人間に見えるらしい

少し近づくと妖怪は周りをキヨロキヨロしていた、偵察？と思つたけど違うと思つた 理由は簡単眼が好奇心でいっぱいになつてた。  
こんなに純粹な妖怪もいるんだと思いそして思いついた、その妖怪、  
彼から血をとれば良いのだと考えた

そして声をかけてみたそしたら嘘をついた、すぐ嘘と見抜いたのは  
彼が妖怪だと言うことも知つてたのもあるけどこの町以外に人間は  
いない、あと数か月にはこの星からあの月に行くのだ 周りの妖怪  
はここを襲撃しようとしてるのもわかつて  
だから周りの人間の集落、村から人を集めた ここをある程度守る  
ために

彼に話かけたら名前がブラックというけど変えたいらしい、本来の  
名前ではないと言つのだすこし変わつた人だと思った  
私も考えた、彼は夜の名前がよく似合つのだ、なぜかそれは彼の雰  
囲気だろうかよくわからぬけど夜を集中的に考えた

結果夜闇、夜の闇 無限に続く永遠の闇だ そして広大な闇でもある 彼はどれくらい生きてゐるのか知りたくなつてきた

彼のことを家に泊める代わりに父さんに彼のことを言った、けど全部は言わなかつた全部言つと彼は殺されるからだ  
私は彼が妖怪混じりと言つた、そしたら父さんは実験に使いなさいと言つた。私はたしかに実験に使う気だつたが彼を知りたいという方が強かつた

まずは彼の日常を見てみた、彼は基本 本しか読まないことと自然を見るのが好きだと知つた

今度は私は彼の血をもらうことにして、そしたら普通に血をくれた  
考えてみたらそれが唯一彼の私から見ての普通だった

理由は簡単、なぜ字が読める?「飯を食べる時だつて箸だつて簡単に使つた、私達の調べだと今の妖怪達はあんまり賢くない  
だけどなぜか彼はそれができる、私は彼はどんな妖怪か知りたくなつて彼からとつた血を調べた

結果彼は純粹な妖怪だが今の妖怪とは違う、今の妖怪と完ぺきな違ひは生活や知識だけではなかつた

彼は現在で最古の妖怪なのがわかつた、正直いつて私は彼をN01 09に書き記した、

種族：妖怪

現在で最古の妖怪

私は今書けることを書いた、少ないとと思うほど彼のことを知るには血だけでは少なすぎる材料だ

簡単に調べた物だから時間があればもっとわかるだろうけど、月に向かう時間が近いそしたら夜のご飯の時に父さんが彼に妖怪退治に向かわせる話をしてた、おそらく父さんは彼をおとりにするつもりだろう次の日に月に向かうことになってる

私は資料を全て持ち、彼の血が入った試験管を丁寧に入れるかこれは絶対に守り抜く必要がある

そして時間が来た、彼は妖怪退治にむかった もう彼と会うことはできないだろう

そう思つてた時、目の前に真っ黒な鳥が降りてきてこいつは「妖怪を連れて遠くに行くよ」と

私は彼が妖怪を説得したのかもしくは…と思つた

でも遅すぎたもう行かなければならない、今度は合えるのはどつて

も難しいまた会えればいいと思った

私はそう思い艦に乗り込んだそして月に向かい始めた時何かが爆発した

私達の町に妖怪達が来たのだ、そしてそれを感知した防衛システムが起動して核爆発を起こした

でも私は何も思わなかつた、彼は遠くに行つた、ようするにこの核の光を浴びる必要がないのだ、私はそれを知つてたからまた会えると思った、いや会いたいと思つた

この星から出た、通称地球 蒼く綺麗だつたそして私は心の中で「またね」とつぶやいた

## 一話 永琳視点（後書き）

主「遅くなつてすいませんでしたああああああああ」

夜一 許さん！部活が忙しいのは知つてたがこの程度で疲れるとほ...

「これでも運動は得意だ！！ただ体力がなしだけだ…まあいいや」

夜一はあまあしいぞ、それにしても永琳視点とは面白いな。よく思ついたな」

主「実は夜闇視点が普通なため他の人視点があんまりでないのだ、  
だからこうやつた」

夜「しかし駄文だな本当に」

主・意のなす事は、ある處へ向かひて、たゞ、其へ渡るだにせば、

夜一それより、今度はいつの時代だ？

次回は詠詠才華の時代だよ そして荷蘭はどうだ  
に着くのか?」

夜「俺参戦確定かよ」

主「そらそうだ、いくら妖力隠しても億年以上生きた妖怪がこの時代の神に隠せるはずがないだろ、それと夜闇はぎりぎりまで妖力を隠してゐるけどそれでも上級妖怪に勝つことぐらいできるよ」

夜「俺強すぎだろ、まあ傭兵やつてたし世界観はモンスターとか普通にいるしな」

主「その通り、単純な戦闘能力はすでに人外だよ、トレックスとか相手にしてそして氷河期を生きたしね、あと夜闇が寝てる間にも氷河期が訪れてるからね」

夜「なん……だと」

主「実はあの月に向かう際に発動した核爆弾は世界中と連動するようになつてたんだよ、あれで地球は強制的に氷河期が訪れたわけ」

夜「なるほど…しかし世界中とはなんでだ？」

主「地球上の妖怪全てを殺しつくそつと考えたんだよ、でも夜闇の場所は運よく核が爆発の風圧以外が来てないよむしろあの時の夜闇のフルパワーの広域攻撃の方が威力が高くて丁度夜闇をそれたんだよ、ん？相殺したつて方が正しいか」

夜「俺とんでもないな、でも実際核直撃したどうなつてたんだ？」

主「すこじやけどするべういかな、まあ当たる」とはないけど

夜「なんでだ？」

主「お前の戦闘経験と反射神経で即座に相殺するからだよ当たり前」

夜「それもそうかこれでも経験豊富かつ、力も世界最凶だしな」

主「まあねそれくらい…強くしすぎたか…イレギュラー入れるのも

いいかな」

夜「ん?何ぶつぶついってんだ?」

主「いや?なんでもないよ、おつとこじまにするか次の話も骨組みはできてるからあとは肉付けだけだよ

あと感想、ここがダメとか教えてください直せるように努力しますのでではまた次回!」

## 3話（前書き）

遅くなりました理由はあとがきで

はいつまで寝ていたののだろうか、あの時からどれくらいたつたのか  
俺はひとまず腹が減ったし喉も乾いたから水を飲みにいってから何  
を食つか考えようとしてた

そして寝ぼけてて気がつかなかつたが、なぜか俺が寝てたところの  
すぐ横に銀髪の少女？ぽいのが寝てる

俺はなぜここいるのか聞きたいがひとまず同族と思った、ここは俺  
が静がに寝てたいから強力な闇の力を捲いたからである

この闇の瘴気に並みの妖怪は一瞬で命が無くなるほどだ だがこの  
闇の洞窟（今命名）普通の大妖怪でも無理だと思つ

なぜなら妖怪も自然と同じような物なのだ、人間が、生き物が自然  
と恐怖する物それが妖怪

だから自然の生命力も吸い取るこの闇相手では闇系統の妖怪以外だ  
とすぐに死に至るほどだ

だからこの少女は闇系統の妖怪だと思つ、この闇の瘴気の中ですご  
い安らかに寝てる

「ん……」

「お 眼を覚ましたか」

「……………」

ん？なんか様子がおかしい？

「……………つー！」

闇で作った大剣を横に一閃してきた

「うおっーー！」

なんとか避けることができたけど……なんだ？

「なんだいきなり攻撃して、俺は敵じゃー（ブンー）っく

俺が喋ってる時にも攻撃してきやがった、これは聞く耳持たずつて  
といふか

どうする……相手はおそらく上位妖怪で闇…同じ系統の妖怪だが…  
やつぱ力でねじ伏せる…か？

そう考えてたら銀髪の少女はもつーからに斬りかかってきた

ブン！

「あぶっーーー！」

間一髪だった、もう少し遅ければ頭と体は一生離れてた

「ちーつーふん！」

かるうじて避けたのもばれてたのかすかさず恐ろしく鋭い攻撃をしてくる

ガギイイイ

なんとか剣で受け止めたがこのままじゃ相手に一方的にやられるだけだ

ガツ

「ふんー。」

ガギイイイイイ

はじいて距離をあけることができたが相手は明らかに本気だ、こちらも本氣で行かなければ

「はああああつーーー。」

横一線

「ーーーーー。」

相手は確実にひるんだ、もう一度！

「せえええいっつー」

わいに重ねて一閃

「つー」

相手はなんとか防ぐことができたがとつとつ耐えきれなくて吹き飛ばされる

そしてなんとか立とうとするが俺は首もとに剣を突き付けた

「俺の勝ちだな」

「.....」

「へ..ビう..した」

「...痛い...」

「それは悪かつたな、だがお前から仕掛けってきたんだぞ?」

「わかつてる.....強い.....」

「それは伊達に何万年も生きてるからな

「何万!、私は.....」

「まあ別にいいよ?それに寝てて隣に男がいるんだもんな

「違う、こには良心地が良かつたから一番良いところにきただけ

「……要するにお前はまだ単純に良心地が良いところを探して俺の所にきたと」

「さう

「わづか……そいえばお前、名前は？」

「名前？」

「わづか、名前因みに俺は夜闇だ」

「私は…………無い」

「無い？」

「いや知らない」

「知らなこどつちだよ……まあいい、名前が無いのか？」

「そうかもしれない

「…………じゃあ名前をつくなよ」

「え？ なんで？ 私は…………闇なんだよ？ 妖怪でも闇を嫌うんだよ？」

「俺は闇の妖怪だ」

「…………」

「忘れてただろ、ソリで此の世界で俺は闇の妖怪なんだよ」

「…………」

「まあ名前いらなになら別に良いんだぞ」

「…名前…欲しい…」

「やうか……名前をどうするか……そうだ、白夜は？」

「白夜？、どうもつ意味？」

「全てに平等に光を当てる物の名前を、ずっとここまでも長い時間  
照らし続ける物だ」

「…私が…照らす…私が闇でも照らせるかな？」

「ああ照らせるとも、暗闇があつて初めて照らせるんだからな」

そう言つた俺は白夜を連れて洞窟を出た

「…まぶしい…」

初めて太陽の光を浴びたよつて見えた、俺はなぜか彼女に世界を見  
せてやりたいと思つた

主「遅くなりました……あと無理やりすいませんでした——」

闇「遅すぎだら、また部活か？」

主「はい、部活です、もうなんとかいきなり厳しくなってきてね、家帰つたら満身創痍状態だし」

闇「だが遅れた原因ではないだろう？」

主「…………はい」

闇「まったく、それでこそなりオリキャラか？」

主「はい、白夜ですが元ネタは空からな」です

闇「おいおい、たしか百鬼夜行の最後に出てくる妖怪だろ？ なんでこの時期に？」

主「俺が好きなだけなのが理由だけね、まあ所詮元ネタだから空亡くうおではないよ」

闇「まあそうだな空亡くうお」なんて表に出たら世界が闇に染まるって言われてるしな」

主「そりだよ、あと絵はググつたり出してきたから自分で調べてね、

一応容姿も載せよつか、ではどうぞーー

名前 白夜

種族：妖怪（闇）

元ネタ：そらなき空亡

能力：闇を操る程度の能力

容姿：髪は銀髪

体の大きさは150cmぐらい

簡単に言うと中学生2年生ぐらいの女の子

性格はおとなしい、無口

顔はかわいい、10人が10人美女と呼びそうなくらい

目の色は蒼色

主「簡単に言うとこんな感じかな」

闇「簡単だが分かりにくいぞ？」

主「うめんなさい…正直本当に容姿不明の妖怪だから……」

闇「まあそうだな、色々あるしなたしか球体だつたり、竜だつたり、上の容姿みたいな感じだし」

主「闇夜よ、わかってくれるか」

闇「ああわかるとも、それにしても鳥頭のお前でもよくできたな」

主「鳥頭はよけいじゃ ああああああ」

闇「喧しきはーそおー」

主「ひでふつーおじてめーいら何いきなりなぐつてんだよー。」

闇「ああ五丑蠅いー、終わりがねえだろつがあ

主「あ」

闇「え?お前忘れてた?」

主「いや、ゼンゼンワスレテナカツタコ?」

闇「主よ、あとで裏へこよ」

主「だが断る、逃げるが勝ちだあああ」

闇「む、主が消えてしまつたか、では次回に会おつ  
作のあの人だ、お楽しみに」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4910y/>

---

東方夜闇伝

2011年11月24日21時55分発行